

## 【動画制作用】私の夢(40代男性)

URL: <https://youtu.be/UXQXCMGg4pY>

### ■自己紹介

私は中林健治といいます。四十六歳です。妻と高校生の娘の三人で、埼玉県に住んでいます。自然が多くて東京にも近いので、住みやすいです。駅から少し離れた住宅街の中に、私の家があります。

私は郵便局で働いて二十年になります。今は、主に窓口でお客様の対応をしています。町の行事や地域の集まりに参加することもあります。郵便局は、地域の人とつながる場所だと思います。お年寄りや子ども、会社の人など、毎日いろいろな人と会います。

仕事では、「人の気持ちに気づくこと」が大切です。たとえば、初めて郵便を出すお客様は、顔が少し緊張しています。話を聞いて、安心してもらえるようにしています。毎日同じ仕事でも、人との会話が少しずつ違うので、あきることはできません。

朝は七時ごろに出勤します。夕方に仕事が終わると、家に帰って家族と夕食を食べます。ニュースを見ながらその日の出来事を話す時間が、私の楽しみです。

休日はゆっくり起きて、近くの公園を散歩します。コーヒーを入れて音楽を聞くのも好きです。娘が部活に行くときは車で送ることもあります。天気のいい日は妻と買い物に行ったり、家で掃除をしたりします。特別なことはしていませんが、静かで落ち着いた休日が好きです。

こうして毎日を過ごしながら、私は「人とのつながり」の大切さを感じています。郵便局の仕事を通して、地域の中で自分の役割を持てていることに、うれしさを感じています。

## ■学生時代と若いころの夢

学生のころ、私は人と話すことが好きでした。友だちと放課後に長く話したり、地域の行事に参加したりするのが楽しかったです。学園祭ではクラスのまとめ役をすることが多く、人と協力して何かを作ることにやりがいを感じていました。もともと人の話を聞くのが得意で、困っている友だちの相談にのることもありました。

高校生のときは「将来は人を助ける仕事がしたい」と思っていました。医者や先生のように特別な資格がなくても、身近な人の役に立てる仕事があればいいと考えていました。大学生になってから、郵便局でアルバイトをしました。手紙や荷物を仕分ける仕事を通して、「人の生活を支えることも立派な“助ける”仕事なんだ」と感じました。

就職のとき、私は地元で働く仕事を探しました。都会で働くことにもあこがれがありましたが、家族や地元の人とのつながりを大切にしたかったのです。郵便局は毎日、地域のいろいろな人と関わることができる場所でした。その点にひかれて、私は郵便局を選びました。

若いころは「仕事=お金をかせぐこと」だと思っていました。しかし今は、それだけではないと感じています。人と話し、手紙や荷物を通して気持ちを伝えることができるのが、この仕事の良いところです。昔の私は「仕事をする理由」を考えたことがあまりありませんでした。でも今は、「誰かの役に立てる時間がうれしい」と思えるようになりました。学生時代に感じた「人と人をつなぐことの楽しさ」は、今の仕事にもつながっています。若いころに思い描いていた夢の形は少し変わりましたが、心の中の思いは同じだと感じています。

## ■働きながら見えてきた現実

郵便局で二十年近く働く中で、町のようすが少しずつ変わっていくのを感じました。昔は商店街がにぎやかで、毎日お客様の声が聞こえていました。でも今は、閉店した店も多くなり、少し静かになったように思います。新しい建物がふえて、人のあたたかさが少なくなったように感じことがあります。

窓口の仕事をしていると、毎日のように来るお客様の変化に気づきます。若いころからよく話していたおばあさんが、だんだん来なくなったり、いつも元気だったおじいさんの来る回数が減ったりします。季節が移り変わるように、人のくらしも少しずつ変わっています。

顔なじみのお客さんが減ると、少しさびしい気持ちになります。だからこそ、来てくださいたの方の笑顔を見るたびに「また来週も元気で会えますように」と思います。郵便局の仕事は、ただ荷物や手紙を受け取るだけではありません。人と人をつなぐ、大切な仕事です。長く働く中で、私は「手紙や荷物には気持ちがこもっている」と強く感じるようになりました。封筒の文字や送り状のひとことには、その人の思いが見えます。窓口で手続きをするときは、「この荷物が誰かを笑顔にするかもしれない」と思いながら受け取ります。小さな封筒でも、大きな荷物でも、誰かの気持ちを運んでいると思うと、仕事にやりがいを感じます。

地域の行事に参加すると、昔からの顔ぶれに会うこともあります。「いつもありがとう」と声をかけられると、疲れがすっと消えます。仕事の中で、人とのつながりがどれほど大切かを学びました。私はこの町で、これからも人の気持ちを受け取り、届けていきたいと思っています。

## ■窓口でのある出会い

ある冬の日、私は窓口で年金の手続きに来た高齢の男性を対応しました。毎月のように来てくださるお客様でしたが、その日はとても寒く、外には雪が残っていました。男性はカウンターに来ると、笑顔で「いつもありがとう」と言ってくれました。

手続きをしながら少し話をすると、「最近、誰とも話していないんだよ」と静かに言いました。その言葉を聞いたとき、私は胸がつまるような気持ちになりました。たった数分の会話でも、その人にとっては大切な時間なだと気づきました。

それから私は、来てくださるお客様に「寒いですね」「お元気ですか」と声をかけるようになりました。ほんの短い言葉でも、笑顔が返ってくると心があたたかくなります。忙しい仕事の中でも、人と話す時間を大切にしたいと思うようになりました。

別の日には、久しぶりに来たおばあさんが、「ここにあなたがいると安心するの」と言つてくれました。その言葉が心に残り、郵便局の仕事には「気持ちをつなぐ力」があると感じました。

このような出会いを通して、私は「話すこと」「聞くこと」の大切さを学びました。人は、話をすることで安心し、心があたたかくなるのだと思います。そしていつか、自分が「話を聞く場所」を作りたいという気持ちが生まれました。

## ■語り場を作る夢

四十歳をすぎたころ、私は少しずつ「この先の人生」について考えるようになりました。郵便局での仕事は安定していて、やりがいもあります。でも、定年の年が近づくと、「自分が何を残したいのか」と考えるようになりました。手紙を届ける日々の中で、人と話す時間の大切さを感じることが増えました。

ある日、休みの日に町のカフェでコーヒーを飲んでいたとき、ふと思いました。「こんな場所で、誰でも気軽に話ができるたらいいのに」と。知らない人同士でも、温かい飲みものを手にしながら、ゆっくり話せる場所。それがあれば、さみしさを感じる人が少しでも笑顔になれるのではないかと思いました。

「語り場」という言葉が頭に浮かびました。自分の話をしてもいいし、誰かの話を聞くだけでもいい。話すことを通して、人が元気になるような場所。そういう場所を自分の手で作れたらいいと思うようになりました。

最初は夢のような考えでした。でも、お客様との会話を思い出すと、「この町には話をしたい人がたくさんいる」と気づきました。だからこそ、自分にできることを少しずつ形にしていきたいと思いました。

ただのカフェではなく、「誰でも来られる場所」にしたいという思いがあります。年齢も、仕事も関係なく、安心して話ができる場所。話することで心が軽くなるような、そんな語り場を作ることが、今の私の新しい夢になりました。

## ■夢を形にするための準備

夢を形にするために、私は少しずつ行動を始めました。まず、休日を使ってカフェの運営について学ぶ講座に参加しました。講師の先生から、メニューの作り方やお店を続けるためのお金の使い方を学びました。最初は知らない言葉が多くてむずかしかったですが、だんだんと自分にもできそうだと感じました。

また、地域のイベントにもできるだけ参加するようにしました。地元の祭りや清掃活動など、いろいろな人と話すようにしています。「こういう場所があったらいいね」と言う人が多く、私の考えに共感してくれる人もいました。その言葉を聞くたびに、夢が少しずつ現実に近づいている気がしました。

郵便局の同僚にも、この夢の話をしました。最初は「カフェをやるなんて意外だね」と言われましたが、しだいに応援してくれる人がふえました。「休みの日に手伝うよ」と言ってくれる同僚もいます。人に話すことで、自分の中でも気持ちがはっきりしてきました。最近では、週末に家の近くのカフェをめぐって、お店の人に話を聞くようになりました。お店を続けるむずかしさや、お客さんとの関係を聞くことで、たくさんの学びがあります。ひとつひとつの出会いが、私の夢の支えになっています。

少しずつ協力してくれる人が増え、「これは一人の夢ではない」と思うようになりました。今はまだ準備の途中ですが、確かな手ごたえを感じています。

## ■不安と迷いの中で見つけた支え

夢に向かって少しずつ動き出したものの、不安を感じることもありました。カフェを始めにはお金がかかりますし、場所を見つけるのも簡単ではありません。家族にも相談しましたが、「本当にできるの？」と心配されることもありました。自分でも「こんな年から始めてうまくいくのだろうか」と思う日がありました。

それでも、この夢をあきらめたくありませんでした。なぜなら、これまでたくさんの人の話を聞いてきたからです。窓口で交わした小さな会話が、人の心を明るくしていることを何度も感じました。だからこそ、私自身が「話を聞く人」であり続けたいと思いました。ある日、同僚に悩みを話したとき、「中林さんらしい夢だね。きっとできるよ」と言われました。その言葉が、心の支えになりました。家族も、私が本気で準備している姿を見て、少しずつ応援してくれるようになりました。

不安がまったくなくなるわけではありません。でも、私は「小さくてもいい、一歩進もう」と決めました。まずは地域の集会所を借りて、月に一度、お茶を飲みながら話せる会を開こうと思っています。たとえ数人でも、人が集まって笑顔になれたら、それが最初の一歩です。

夢は大きくなくてもいいと思います。できることを少しずつ続けることで、自分もまわりの人も前向きになれる。そう信じて、今も歩き続けています。

## ■これからの夢

私は今も、週末の語り場を開く準備を続けています。新しい机やイスをそろえ、安心して話ができる空間を作ろうとしています。季節ごとに小さなイベントを開き、地域の人たちと笑顔を分かち合える場所にしたいです。

郵便局での経験を通して学んだのは、人と人をつなぐことの大切さです。手紙も言葉も、人の心を動かす力があります。語り場では、その「言葉の力」を大切にしたいと思います。相手の話を聞くだけで、誰かが少し元気になることがあります。私は、そんな温かい場所を作りたいのです。

夢は年齢に関係なく持つことができます。小さな一歩を続けることで、自分もまわりの人も少しずつ変わっていくと思います。私はこの夢を通して、「誰かと話すことは、自分を元気にすること」だと伝えたいです。

四十年代から始まった私の挑戦は、まだ途中ですが、すでにたくさんの笑顔に出会えました。語り場が完成したとき、私は心からこう言いたいです。「ここに来てくれてありがとう」その言葉が自然に出るような場所を作ること。それが、私のこれからの夢です。

